Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-04

スカイプを利用した日本語・ドイツ語 遠隔タンデム授業の実践

林, 良子
杉原, 早紀
Trummer-Fukada, Stefan

(Citation)
国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要,41:44*-54*

(Issue Date)
2013-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005425

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005425

スカイプを利用した日本語・ドイツ語遠隔タンデム授業の実践[1]

林　　良子
杉原早紀
Stefan Trummer-Fukada

1．はじめに

近年，外国語教育の場において，学習した表現，知識を様々な形で直ちに実際の会話において，実践する試みが盛んに行なわれるようになってきた．ドイツにおける日本語教育の現場においては，例えば教室外の活動として，日本人学校へエクスカーションに出かけたり（杉原，2013），教室内の活動として，ネイティブスピーカーを教室内にゲストとして招き，実際にディスカッションを促したりするなどの試み（三輪・野呂，2013; 野呂・三輪，2013）等が報告されている．教室外の活動として，ドイツでは「タンデム」[2]という自律学習形式がよく用いられており，タンデムを用いた学習も教員によって多いに奨励されている．タンデムは自分の母語を目標言語とする学習者をパートナーとして探すことからはじまるが，近年のインターネット環境の発達により，海外などの遠隔地に在住しているパートナーとタンデムを行なうことも可能となってきた．インターネットを用いた遠隔タンデムは，目標とする言語が話されている場にいる目標言語の母語話者と，教室内での学習を直ちに結びつけることを可能とする．

本報告では，2012年10月から2013年１月に行なわれたハンブルク大学日本語学科の日本語学習者と神戸大学のドイツ語学習者間で行われた，インターネットを用いた日本語・ドイツ語の遠隔タンデム授業の概要を示し，遠隔授業実践における効果や問題点についても述べる．

２．遠隔タンデム授業の概要

２．１．授業期間と参加者

遠隔タンデム授業を行なった期間は，2012年後期（10月～2013年１月，ドイツの Wintersemester）であり，参加対象となった学生は，神戸大学のドイツ語SB 授業[3]受講者24名と，ハンブルク大学日本学科の５セメスター生32名であった．前者は，１セメスター（15週）に週２回のドイツ語を受講した初級学習者（学習レベルは CEFR[4]のＡ１以下に相当）であり，後者は日本語を主専攻とする２年目の学生（学習レベルはおよそＢ１～Ｂ２レベル）で，日本語 IV の授業受講者であった．

２．２．実施方法

週１回の授業において，日本語またはドイツ語の会話を教員が予め指定したパートナーと30分間行なうこととした．10月の初めの数週は７時間，それ以降は８時間という時差の関係から，神戸大学の学生は日本時間の18時から30分間行ない，ハンブルク大学の学生にとっては，ドイツの夏時間では11時，冬時間では10時からの実施となった．これはそれぞれの大学で，およそ授業の終了前30分，開始から30分にあたる．30分間は日本語またはドイツ語の予め決められたどちらかの言語のみで会話をするように指示し，日本語またはドイツ語での会話を隔週で行なった．

受講人数が等しくないことから，会話は１名対１名のペアから，２名対３名までのグループで行ない，相手が欠席した場合，うまく回線がつながらない場合には，授業の場で教員が他のペアないしはグループに加わるよう指示した．

会話には，フリーウェアの skype[5]を使用し，参加者全員が授業用のアカウントを作り，それを教員に知らせ，教員が会話ペアまたはグループ作成のためにリストを作って管理した．skype を使用するためのコンピュータは，神戸大学内の PC ルームで予めインストールされた PC を用いるか，個人のスマートフォンやノート PC にインストールされた skype を用い，学内無線 LAN を利用して相手にコンタクトした．ハンブルク大学では，個人のノート PC またはスマートフォンから学内無線 LAN を通して接続を行なった．

さらに，学期中に２回，全体でのグループ発表をする機会を設けた．その際には，教師の PC またはタブレット間を skype によって接続し，その画像をプロジェクタで学生に見せ，音声出力をスピーカーに接続して行なうという方法を用いた．

２．３．授業時の課題

神戸大学，ハンブルク大学の学生の外国語習熟レベルが大きく異なることから，それぞれの学習者には異なった課題を与えた．ハンブルク大学の学生には，クラス内のグループごとに日本人学生に対するアンケートを作成し，そのアンケートを日本語タンデムで実施するという課題を与えた．また冊子状に作成した学習記録をドイツ語で毎回記入して提出してもらい，教師のコメントをつけて翌週返却した．ドイツ語タンデム時には，習熟度の高くないドイツ語学習者と如何に円滑に会話を行なうことができるかを考えながら，なるべく日本語などの媒介言語を介さずに進めるよう指示した．一方，神戸大学のドイツ語学習者には，同じ週の別の授業において習った，文法，会話表現を用いて，予め会話の話題を設定し，その上でドイツ語母語話者に対して質問し，回答を理解しながら会話を成立させるという課題を与えた．会話がうまく成立しないときには，skype のチャット機能を用いて，文字を助けとして会話を成立させるように指示した．また，ハンブルク大学学生と同様に，毎回のタンデム後，学習の記録をつけて提出してもらった．学習の記録には，「今日の話題，新しく習った語，表現，面白いと思った点，反省点」という項目を設け，それぞれについてタンデム直後に記入して提出してもらった．

２．４．評価

神戸大学においては，２回の全体プレゼンテーションに対する取り組み，出来映えを評価の対象とするとともに，学期末に口頭試験[6]を行なって評価を行なった．プレゼンテーションは，３～５名ほどのグループに分かれ，各グループでドイツの学生に伝えたい内容について準備を行ない，ドイツ語で発表した．ハンブルク大学の学生は，タンデムで実施したアンケート調査の結果をまとめ，

日本語で発表した．プレゼンテーションで発表の出来栄え，および１学期のタンデムを振り返ったレポートの提出を義務づけ，それらを評価の対象とした．

３．タンデム実施における問題点および工夫点

すでに言及したように，日本とドイツ間の遠隔タンデムにおいては，時差が大きな問題となる．本稿の例では，日本では夕刻，最終の授業時，ドイツでは早朝，最初の授業時に時間割を組むことにより，オンラインで会話をする時間を設定することができた．

神戸大学の学生のドイツ語力とハンブルク大学の学生の日本語力が大きく異なることから，両言語会話時に共通の話題や課題を与えることができなかった．このため，本例では，日本語会話時とドイツ語会話時でそれぞれ異なる課題を与えて学習者のモティベーションを低めないよう工夫を行なった．より習熟度の高いハンブルク大学の日本語学習者へは，自分の母語を学ぶ学習者の問題点の観察も義務づけ，ドイツ語習熟度の低い学習者に対し自分の母語を用いてどのように対応してよいかを考えてもらうきっかけとした．

今回の実践において，最大の問題点の一つは欠席者への対応であった．事前にパートナーを割り振りしても，授業の場でパートナーを変更する必要に迫られた．また，接続の不安定さも問題となった．接続がうまくいかない場合には，双方の学習者に不満感が募り，場合によってはパートナーをさらに変更することとなった．そのため，会話を開始してから，後から別のパートナーが加わったり別のグループに移動したりということがしばしば起こった．

さらに，skype の長所である会話と同時にチャット機能が使えることを最大限に利用したタンデムが遂行できたものの，ドイツ語会話時にはドイツ語習熟度の低さから，文字によるコミュニケーションに頼ってしまい，音声によるコミュニケーションを阻害することさえもあった．このような場合には，監督者である教員が，ペアまたはグループによる音声による会話を促したり，会話のヒントや手助けを与えたりした．一方日本語での会話時には，チャット機能を使って語彙の漢字を示すことができ，日本語語彙の理解・学習の促進に役立てることができた．

４．学生アンケートから

授業終了時に，学習の記録とは他に授業に関するアンケートも行なった．日本語学習者であるハンブルク大学の学生からは，遠隔タンデム授業を通して，日本語使用時の①自信や慣れにつながり，②丁寧な話し方，③男女の話し方の差などについて体験を通して習得することができたため，有意義であったという感想が寄せられた．また，パートナーのドイツ語学習を手助けするという立場から，神戸大学のドイツ語学習者とドイツ語会話を試みたことで，ドイツ語学習のチューターとして，①メンタル面でのケアの重要性，②チャットの有効性，③コミュニケーションや礼儀の捉え方の違い（質問やメモの取り方など）に気がつくことができたというコメントがあった．さらに，全体のプレゼンテーションにおいて，目標言語話者の前で発表を行なうことで，発表の場で用いる日本語を使用するための自信がついたこと，プレゼンテーションに対する日本側からの質問やコメントがすぐにもらえることがよかったとする意見があった．ただし，上記の問題点にも挙げた，神戸側とハンブルク側の言語レベルの差，タンデムのパートナーの頻繁な交代，またアンケートをベースにしたタンデムの実施という点に関しては賛否両論があった．

一方，ドイツ語学習者である神戸大学の学生からは，①実際に使われている生きたドイツ語が学べた，②分からないこと，伝わらないことについてのフィードバックがその場で得られて有意義だった，③発音の大切さを実感した，④ドイツ文化，ドイツ語への興味がわいた，⑤日本について知らないことが多いことに気づかされた，といった感想が寄せられた．

さらに，授業開始時と終了時のドイツ語能力を自己評価してもらったところ，授業開始時と終了時の自己評価の差の平均が，話す能力（0.91），聞く能力（0.89），書く能力（0.75），読む能力（0.51）となり，遠隔タンデム授業を通して，特に話す能力と聞く能力の自己評価に大きな変化があったと言える．自己評価の各項目は，CEFR の A 1 レベルの記述文に基づいて作成，学習者にそれぞれの項目について５段階で評価してもらった．自己評価の詳細は表１に挙げるとおりである．

５．おわりに

本稿では，ドイツに住む日本語学習者，日本に住むドイツ語学習者という２つのグループにおいて，インターネットを介した遠隔タンデムという手法を用いた会話授業実践の報告を行なった．一般に，タンデムという手法は，外国語の授業の教室外活動として，自律活動の一環として行われることが多いが，教室内の活動として義務づけたことにより，学習者全員に学習した項目や課した課題について直ちに実践の場を提供することとなった．

今回の遠隔タンデムという手法においても，Brammerts（2005）の挙げるタンデムの５つの特徴がよく生かされていたと言える．すなわち，①学習目的のコミュニケーション，②自然なコミュニケーション，③ペアワーク，④協働の原則（Gegenseitigkeitsprinzip），⑤自律の原則（Autonomieprinzip）[7]である．

この実践の場での会話パートナーは，普段のそれぞれの生活では遭遇することがほとんどない，より自然（authentic）な目標言語の話し手がパートナーであり，かつ，自分の文化背景に興味をもつパートナーであった．遠隔タンデムを通じて行なわれるのは，留学や海外移住によって目標言語の話される土地に移動してきた学習者と目標言語を母語とする話者の間の会話ではなく，海外に住む学習者と目標言語のみが話される土地に住む目標言語母語話者と会話である．前者の場合には，目標言語でなされる日常の文化的背景を学習者も同時に共有しているが，後者の場合にはそれがほぼ共有されていない状況のため，言葉によって説明を要する部分が大きくなり，その結果，より高度なコミュニケーション能力が必要となり，お互いに助け合うこと，協働することが不可欠となる．また，スカイプの画面共有機能を使って，お互いの町の写真を見せ合ったりするペアもいくつか見られた他，それぞれの町や大学について情報交換をすることで旅行先，留学先としてのドイツ，日本に興味をもち始めるケースも見られた．

今回，授業の中でタンデムだけでなく，全体によるプレゼンテーションの場も設けたことで，通常の会話表現の他に公式な場での表現を練習することもできた．また，アンケートなどの活動課題を与えたことで，研究・調査に必要な表現なども実践を通して覚えることができた．タンデムという手法を用いたことにより，自分の母語，文化に関する客観的な知識への気づきのきっかけとも

表１　CEFR 記述文[8]に基づくドイツ語学習者の能力自己評価

能力	記述文	評価1	評価2	評価差（2−1）
聞く能力	はっきりゆっくりと話してもらえば自分，家族，すぐ周りの具体的なものに関する聞きなれたごく基本的な表現を聞きとれる．	2.10	3.10	1.00
	直接自分につながりのある領域で最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる．（ごく基本的な個人，家族の情報，買い物，近所，仕事など）	2.10	3.10	1.00
	短いはっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を聞きとれる．	2.33	3.00	0.67
話す能力	相手がゆっくり話し，くりかえしたり，言い換えたりしてくれて，また自分が言いたいことを表現するのに助け舟をだしてくれるなら，簡単なやりとりができる．	2.86	3.76	0.90
	直接に必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら，聞いたり答えたりできる．	2.35	3.33	0.98
	単純な日常の仕事の中で，情報の直接のやりとりが必要ならば，身近な話題や活動について話し合いができる．	1.67	2.67	1.00
	通常の会話を続けていくだけの理解力はないが，短い社交的なやりとりをすることはできる．	2.29	3.29	1.00
	どこに住んでいるか，また知っている人たちについて，簡単な語句や文を使って表現できる．	2.67	3.52	0.86
	家族，周囲の人々，居住条件，学歴，職歴などを簡単な言葉で一連の語句や文を使って言える．	1.86	2.57	0.71
書く能力	新年の挨拶など短い簡単なはがきやメールを書くことができる．	1.86	2.52	0.67
	（ドイツ語で）ホテルの宿帳に名前，国籍や住所といった個人のデータを書き込むことができる．	2.00	2.62	0.62
	直接必要のある領域での事柄なら簡単に短いメモやメッセージを書くことができる．	1.95	2.90	0.95
	お礼の手紙など，短い個人的な手紙なら書くことができる．	1.81	2.57	0.76
読む能力	掲示やポスター，カタログのよく知っている名前，単語，単純な文を理解できる．	2.90	3.33	0.43
	ごく短い簡単なテクストなら理解できる．	3.10	3.62	0.52
	広告や内容紹介のパンフレット，メニュー，予定表のようなものの中から，日常の単純な具体的に予測がつく情報を取り出せる．	2.62	3.19	0.57
	簡単で短い個人的な手紙を理解できる．	2.25	3.05	0.80

なった.

このように，今回の実践においては，時差，学習レベル差といった問題点を乗り越えたうえで，双方の学習者にとって有益な授業が展開できたと考えられる．今後はより効果的な授業運営方法についてさらに検討するとともに，このようなインターネットを介した遠隔授業のさらなる可能性を探っていきたいと考えている.

謝辞

本研究は，神戸大学大学院国際文化学研究科教育プロジェクト経費（平成23年度「インターネットを用いた海外日本語学習者への教材発信プロジェクト」，平成24年度「ビデオ会議システムと動画発信による海外日本語学習者との交流プロジェクト」，平成25年度「欧州日本語学習者とのインターネットによる遠隔授業・交流授業の設計と運営」，いずれもプロジェクト代表者：林良子）を受けて行なわれた.

註

1　本稿は，2013年３月１日（ドイツ，ミュンヘン大学）にて行われた第２回 JaF trifft DaF（日本語教育・ドイツ語教育者懇談会）での発表内容（林良子・杉原早紀・シュテファン・トゥルンマー＝フカダ「スカイプを利用したタンデム授業の実践報告」）をまとめたものである.

2　タンデム（Tandem）とは，「二人乗り自転車」を比喩的に用いたもので，異なる母語を持つ２人が，ペアワークの中で互いに相手の母語を学ぶ相互的な外国語学習方法である（Brammerts, 2005）．具体的には２名の参加者が時間を区切り，例えば前半30分は１つの言語で会話，後半30分はもう一つの言語で会話するといった形式をとることが多い．いわゆる language exchange（交換授業）と呼ばれているものに近いが, Brammerts（2005）では, タンデムにおいては，２名の参加者がパートナーの母語，すなわち自らの目標言語でコミュニケーション能力を高めること，パートナーの人となりや文化的背景を知ること，職業あるいは余暇といったパートナーのもつ他の分野の知識や経験にも学ぶことを試みるということを定義に加えている（北

村 , 2012).

3　週２回母語話者の教員による授業も含めて行なわれるいわゆる「インテンシブコース」と言われている授業であり，１セメスター終了時に希望調査を行なって受講者を選抜するもので，特に学習意欲が高い学生が集まっている.

4　ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages）をここではCEFRと略す.

5　http://www.skype.com/ja/（2013年９月30日閲覧）

6　口頭試験の詳細については, 別稿（Trummer-Fukada 他，2013）に述べられている.

7　④⑤は北村（2012）による日本語訳である.

8　吉島他訳編（2004）を参照に，p.28の表２自己評価からＡ１レベルの能力記述文を抜き出し，自分のドイツ語能力に関してそれぞれの項目についてあてはまるかどうかを５段階で評価してもらった.

引用文献

Helmut Brammerts（2005）Autonomes Sprachenlernen im Tandem: Entwicklung eines Konzepts. In: Heltmut Brammerts & Karin Kleppin（Hrsg.）*Selbstgesteuertes Sprachenlernen im Tandem: Ein Handbuch*, 2. Auflage, pp.9-16, Stauffenburg Verlag

Stefan Trummer-Fukada, Yoshikazu Masuda, Saki Sugihara, Ryoko Hayashi（2013）Kursunterstütztes „Skype-Tandem“ und die Möglichkeiten selbstbestimmten Lernens in institutionell durchgeführten Sprachkursen. Zum japanisch-deutschen Tandem Projekt an den Universitäten Hamburg und Kobe.『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』，９号，pp.1-18

北村美里（2012）「言語表出困難場面から見るタンデム学習の特徴」. 神戸大学大学院国際文化学研究科修了研究レポート

杉原早紀（2013）「ドイツ大学教育制度改革と日本語教育―ハンブルク大学の場合」. 神戸大学大学院国際文化学研究科異文化交流研究センター研究報告書『EU の内と外における共生の模索』（坂井一成・岩本和子編），pp.21-27

野呂香代子・三輪聖（2013）「何のための日本語教育か？－社会参加のための参加型学習の可能性を探る―」.『第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム予稿集』，p.35

三輪聖・野呂香代子（2013）「学習者の日常を取り入れた活動とは？－経験知重視の対話にもとづく授業設計」．第19回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム「インターアクションからみた授業実践とカリキュラム開発」口頭発表資料，2013年３月１日～３日（於：ミュンヘン大学）

吉島茂･大橋理枝訳編（2004）『外国語教育 II―外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠―』．朝日出版社

Skype-tandem via the internet between a German class at Kobe University and a Japanese class at University of Hamburg

Abstract:

This paper outlines the attempt to conduct a remote lesson via the internet between a German class at Kobe University and a Japanese class at University of Hamburg. The two groups of learners participated in a language exchange in their own classrooms through a method called "tandem" using the freeware skype™. There was a difference in number and proficiency between the two groups, e.g., thirty two German learners of Japanese were about B1 to B2 in the Common European Framework of Reference for Languages（CEFR）（intermediate）, and twenty four Japanese learners of German were less than A1（beginner）. Diverse difficulties caused from the differences of time-zone, number of participants, level of proficiency, and learners' interests are reported and some efforts to overcome such difficulties and to conduct more effective remote lessons are described.

Keywords: remote lesson, tandem, German as a foreign language, Japanese as a foreign language
キーワード：遠隔授業，タンデム，外国語としてのドイツ語，外国語としての日本語